

## ジークの白いカバン

一

むかしジークという名のおじいさんがいました。

不思議なカバンをもって世界を旅していました。雪が積もった山を越え、砂漠や深い森を越え、海だつていかだに乗つて越え、あちらこちらの町や村にやってきました。

破れた服を着て、広い縁どりの麦わら帽子をかぶっていました。穴の開いた大きな靴をはき、

「パタン、パタン」

と足音をたてて、やってくるのです。

こんなふうには、身なりは浮浪者のようだったけど、笑うと眼のまわりに、しわがいつぱいできて、やさしい顔になります。

そして、手には白いカバンをぶら下げていました。カバンはジークじいさんのからだの半分くらいあります。

大きな丘を越すと、小さな町がありました。

ジークじいさんはその町にむかって歩いてるようです。

町の入り口にはカンバンがあつて町の名が書かれてあります。ふしぎなことにカンバンから中にはいると草や木は少ししかなく、人のほかに動物はみあたりません。

あちこちから、

「ギーギー、ガタン」

「ギーギー、ゴトン」

と機械の音が聞こえてきます。

風は、

「ビュー、ビュー」

「ブオー、ブオー」

とふいています。

町の人たちはいそがしそうに働いているし、子どもたちは家の中にこもっています。どういふわけか笑い声はきこえてきません。

三

ジークじいさんがあの白いカバンをひきずりながら町の中心の大通りを歩いていくと、  
「めぐんでやるものなんか、何にもないよ」

「はやく行っちゃいな」

と、町の人たちはジークじいさんを追いたてるのです。

けれどジークは知らん顔。どんどん歩いていきます。町のまん中の広場までくると、  
チョココンと腰をおろし、おおきな白いカバンから赤いテントを引っ張りだして、その中  
で、

「グーグー」

「プープー」

といびきをかいて寝てしまいました。

町の人たちは、さんざんにどなって追いたてるのですが、やっぱり、

「グーグー」

「プープー」

といびきをかくだけで、ぜんぜん動きません。みんなはあきらめて、

「へんなじいさんだ」

とぶつぶつ言いながら家にもどっていきました。

夕日も山のはしにすがたをかくし、いちばん星がかがやきはじめました。

#### 四

つぎの日の朝がやってきました。

大きな丘から、まぶしい太陽がのぼってきます。けれど、町には冷たい風が吹き、どこから笑い声は聞こえてきません。

町の人たちは窓から顔をだして、じっと、ジークをにらんでいます。けれどジークは知らん顔。大きなあくびを、

「アウ アウ アー」

「アウ アウ アー」

と二つ三つしてから、あの大きな白いカバンのなかから、パンやベーコン、それにパイなどを取りだして、顔をしわくちやにして、おいしそうに食べます。

五

そしてまたつぎの日の朝がきました。

ジークじいさんは、白いカバンから、湯気がたっている紅茶を取りだして、

「フーフー、ホーホー」

とさましながら、うまそうに飲んでいきます。

今日も朝から、

「ギーギー、ガタン」

「ギーギー、ゴトン」

という機械の音のほかは何も聞こえません。そして一日が過ぎました。

六

またつぎの日の朝がきました。

町の人たちは、おじいさんが白いカバンから、いろいろな物を取りだすので、だんだんと気になりはじめました。今日はカバンから何を取りだすのだろうか、みんな窓か

ら首をのぼして、

「ジーン」

と見ています。

すると、カバンの中をゴソゴソかき回したかとおもうと、頭に赤いかんむりをかぶつて二本足で立つ白い生きものをだしました。そいつは二三度あたりを見まわしたかとおもうと、大きな声で、

「コケコッコ、コケツ」

となきました。

さあたいへん。町の中は大きすぎ。みんな、ニワトリなど見たことも、聞いたこともなかったのに、

「ヒヤー、フエー」

と叫んで逃げだします。びっくりして腰をぬかしたり、ころんだり。

七

そしてまたつぎの日の朝がきました。

「キャン、キャキャン」

となく小さな動物がでてきました。

「モー、ウンモー」

となく大きな動物もでてきました。

町のみんなは、またまた、大さわぎです。

子供たちは、

「キャン、キャキャン」

となく動物には、子犬と名前をつけました。

「モー、ウンモー」

となく動物には、ちち牛と名前をつけました。

ジークじいさんは、それから毎朝、どんどん、おかしなもの、を取りだします。冬から、きゆうに春になったみたいです。

八

そしてまたつぎの日の朝がきました。

町の人たちは、

「今朝は何を取りだすんでしよう」

「今日はどんな生きものが出てくるんだろう」と楽しみでしかたありません。

子どもたちは、毎日、毎日、見たことのない草や木や、見たことのない生きものに、自分たちで、名前をつけて呼んでいます。

九

そして、百日め、の朝がきました。

町はずれの家に住んでいる女の子の姉妹は、

「今朝は、赤や黄色の花を、持ちきれないほどだすかしら」と、朝起きるとささやき合いました。

ジークが取りだした子犬と仲良しになり、いまではその子犬といっしょに暮しているという町のおじいさんがいます。そのおじいさんは、となりの若者に、

「今日は、きっと、大きな大きな動物を取りだしますぞ」



と言いはります。

町はずれの人は、みんないっしょに連れだって、ジークじいさんのテントがある広場にむかいます。

広場のまわりの人は、窓から首をのばして、顔をのぞかせ、ジークじいさんを待っています。

十

ところが、どうでしょう。

赤いテントはあるのですが、ジークじいさんの姿は見えません。あの大きな白いカバンも、ありません。

子犬となかよしになった町のおじいさんは、広場のまん中で、涙を、

「ポロポロ、ポロポロ」

とこぼしています。みんな朝を楽しみにしていたのです。

町のおとなたちは、がっかりした顔、悲しい顔、きよとんとした顔をしています。でも、あちら、こちらを見ると、どうでしょう。

子どもたちが、タンポポ、スマイレ、と名前を付けた花が、咲いています。ミツバチと名前をつけた虫は、あっちに行ったり、こっちに飛んだり。アリと名前を付けた小さな虫は地面を、

「カサコソ、カサコソ」

と動き回り、頭をぶついたりしています。子犬だって、ちち牛だっています。みんな子供たちが付けた名前をもっています。

子どもたちは、かけだしたり、ころんだりして、動物たちと遊びはじめました。鬼ごっこを始める子どももいます。

がっかりした顔、悲しい顔をしていた、おとなも、子どもたちの楽しそうな様子を見て、笑いながら、みんな話しながら、家に帰っていききました。

## 十一

丘のうえで、このできごとをみていたジークじいさんは、ちよっぴり安心して、

「ホッ」

と小さな白い息をはきました。

それから、あの白くて大きなカバンをひきずって、

「ウンシヨ、オンシヨ」

と、川を越え、山を越えて歩いていきました。米粒のように小さくなり、とうとう見えなくなってしまうました。

## 十二

しばらくすると、どうでしょう。

この丘のうえには入道雲が、

「モクモク、モクモク」

と、真つ青な空にむかって立ち上がっていきました。

これは、きつと、ジークじいさんの小さな白い息にちがいありません。

※浮浪者。五十年前の手書きの原文は「乞食」とする。用語を考慮して「浮浪者」としたが文の流れからみるならば原文のままがよい。